

幹部足る心構え（後編）

1. 率先垂範

部下に対し、自ら率先垂範すべし。

自ら事を決するとは、自分の部下の行うことに対して、的確な決心と判断指図の下において、接しているか。という意味である。

「俺のやる通りにやれ！」ということ。

上に立つ者が迷いある姿を持つと、部下は半信半疑となり自信喪失する。

上司の行動に対し、大きなしこりを残すことになる。

仕事に於いて責任を全うするとは、一方には上に具申を行い、一方には責任ある態度を以って、部下に臨み、部下を励まし且つ慰めて行く。

下に向かってだけのものでなく、上に向かっての責任、時には方針変更の要求をすること。

会社には、社外に出せない機密が多かれ少なかれ存在するもの。

幹部足るべき者は、運命共同体である。

機密保持を守らない。会社に対する裏切り行為をしてはならない。

人間社会に於いて許されない行為である。本来人格同志の付き合いである。だから、これらの行為は、人に対して落胆の思いを与える。

任務を全うする(責任的態度)とは、裏切り行為を行わない。

心理的に不快な思いを与えない。ということ全て含まれている。

経営者は、後ろを向くことを許されていない。

世の中は常に動いている。だからこそ、そこに留まる現状維持は、退歩と同じである。

一歩の前進がある。

そこで初めて、今日の生き甲斐をそこに与えてくれるから。

現状維持では、生活を維持できない。お互いの生活及び、組織としての会社は、前へ進んでいる間だけ、維持が可能なのである。

「飽くなき前進！」

人は、個人個人により、出来る度合いには差がある。人は、怠けたい、汗を流したくない。と思っているから、退歩である。

核足るべき幹部が、前向きの姿勢を常に自らが示すと共に、部下達を叱咤激励しなければならない。

2. 常に社会的立場に立つ

経営は、全社的立場。

幹部は、自分の与えられた任務を全うさえすれば、隣の仕事がどうなってもよい。というのでは、困る。ダメ。

お互いの身体は、一部の不具合があれば、すぐに身体全体に影響する。身体に偏りがあると、全体の動作が鈍る。全社的立場に立って物事を判断し、評価しなければならない。得意先、上司、同僚、部下、、、、これら全ての人間関係の保てる人でないといけない。

判断は正しいが、人格の伴わない人では、人は付いて来ない。

機能を備えていても、人格の良くない人には、人は付いて来ないものである。

得意先との関係で例えるなら、商品というのは、良いという理由だけで売れる訳ではない。その販売員の人格が客に満足を与えているかどうかで、売れるか否かが決まることの方が多い。

全社的判断と信頼関係の保持。

ヒト・モノ・カネの管理は、総括的立場に立って初めて行えるもの。

(責任者として常にものを考えてほしい)

一片の紙切れでも、大事にする。この姿勢が幹部に備わっていること。管理とは、部分的世界にあるものではなく、総括的世界に於いて初めて存在するもの。

3. 先見性を持ち、革新を求めよ。

先が見えない指導者に付いて行く部下ほど、哀れなものはない。

先が見えないとは、常にやることが後手後手に回る。

同じ品物が同じ所へ何度も返って来る。

先が見える指導者は、営業・方針のみならず、同じ品物を何度も往復させない。という点も含めたもの。

人間は同じ事をやっている、これで良いのか？

不安、不満、退屈になる。

退屈は、全てのことがやりっ放しになり、ヤル気を失ってしまう。

退屈させない、マンネリからの脱皮。

不安、不満、退屈の処理革新を求める。革新とは、過去を破壊することではない。過去に対して、積み重ねを行うこと。一步の前進である。

社会事象の流れの中に於いて、常に柔軟性を持って環境に適応出来ること。

この柔軟性は、人を育て得るかどうかにつながる。

一事を以って押し切る一徹さは、傍迷惑を招くことがある。

4. 頼られる上役

相手にされる幹部でなく、当てにされる幹部であれ！

相手にされるということは、適当に付き合ってくれるということ。

当てにされるということは「君、頼むよ！」ということ。

当てにされる幹部は案外少ないもの。

日進月歩進む会社以上に、進んでくれる幹部でなければならない。

同僚関係に於いても共に知恵を出し合い、助け合って頼りになる存在。

いい人だけど頼りない。仕事は出来るけど、教養のない人。

これでは困る。

「ああいう人になりたい。」と考えさせるような上役。

部下の目標となるべき上役。

理想の上役とは、出来ないことは出来ない。

やれということは、断固としてやらせる。

失敗したら、自分が責任を取る人。決して部下と妥協する人ではない。

幹部とは、部下を使って仕事を全うし、結果に対して責任を取る者。

上役は、自分が仕事をするより、部下を使って仕事をする者。

本人に、如何に能力があっても、部下を使って結果に責任を取る人でなければ、幹部とは言えない。

仕事をさせれば“名人芸”だが、人を使ってさせると全くなっていない。これを職人と言う。

自分の手でする仕事は完璧。

自分の人格を以って行う仕事に於いて、円滑さを欠く人は、幹部とは言えない。

幹部足る責任を果たす為には、前向きに自らが範を示さねばならない。積極的に先手先手と流れるような命令と方針を与えて行かねばならない。

しかし、それ以上に大事なことは、部下と共に汗を流す人、共に泣く人でない限り、部下が全幅の信頼を置いてくれない。

幹部は、物事の解決に対して、長い視野に立ってモノを観なければならぬ。

事実の根底に在る真実を見極めることが大事。

5. 結び

幹部は哲学を持て。

何故、こうしなければならぬのか。の、理由付けを持て。ということ。

理由付けの行動がなければ、幹部ではない。

事実を裏付ける真実を観る眼を持つこと。

理解の世界から、体得の世界へ進め。

当たり前を当たり前にする事の苦勞、努力なくては、

その当たり前を当たり前として全うすることは、出来ない。